



2019 年 (令和元年)
7月号 (No. 890)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

令和元年度通常総会を開催 次期役員案を承認後、臨時理事会において 古野淳・新会長を選出

令和元年度通常総会が6月22日、東京・四谷の主婦会館プラザエフで開催された。会員129名が出席し、「平成30年度事業報告」「平成30年度決算報告」「令和元年・2年度役員選任」「平成31年度事業計画および収支予算」について審議して、いずれも原案どおりに可決承認された。さらに、総会終了後に開かれた臨時理事会において、次期会長に古野淳理事を選出した。

■小林政志会長挨拶 新たな増収策の模索が課題

冒頭、小林政志会長より次のような挨拶があった。

「近年取り組んできた財政基盤強化の様々な施策もあって、平成30年度も前年度に引き続いてわずかなではあるが黒字化を達成できた。ただ、会費のみの事業運営には限

界が見えてきている。収益事業の拡大を模索する一方で、寄附に頼る制度の充実を図り、寄附の受け入れを推進していきたい」
「昨年は改革事業推進委員会を立ち上げた。これからの日本山岳会はどうあるべきか、ほかの山岳団体との差別化をどのように図っていくか、などをテーマに活動を進

目次

令和元年度通常総会を開催 次期役員案を承認後、臨時理事会 において古野淳・新会長を選出 … 1	
会長退任にあたって … 4	
会長就任にあたって … 4	
晴天の下、第73回ウェストン祭開催される … 6	
徳本峠越えとウェストン祭に参加して … 7	
支部長が代わりました … 8	
活動報告 … 12	
遭難対策委員会	
山行委員会／遭難対策委員会	
支部だより 越後支部 … 13	
新入会員 … 15	
図書受入報告 … 15	
図書紹介 … 16	
会務報告 … 17	
ルーム日誌 … 17	
会員異動 … 18	
INFORMATION … 18	
編集後記 … 19	

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 … 10～20時
水・金 … 13～20時
第2、第4土曜日 … 閉室
第1、第3、第5土曜日 … 10～18時

めている。本総会をもつて役員が交代するため、新しい理事の方々にバトンタッチをしていく」

■平成30年度事業報告・決算報告

本年度の総会出席者は129名。委任状提出者は919名、議決権行使書提出者は2188名で、出席者と合わせて3236名となり、現在の総会員数4670名の過半数を上回っているため、総会是有効に成立することが確認されたのち、議案審議を開始した。

平成30年度事業報告は永田弘太郎・総務担当常務理事より、同決算報告は古川研吾・財務担当常務理事よりそれぞれ説明があった。

「事業報告」安全登山の普及の一環として登山講習会、雪山天気予報の充実、冬山登山指導事業の積極的な展開などの諸施策を進めた。

「山の日」事業関連では、30年度は鳥取県・大山で開催された第3回「山の日」記念全国大会の実施に協力するとともに、各支部と連携して地元に着した周知活動を行なった。

海外登山については、長く続いた日中韓学生交流登山が本年度で最終回を迎え、中国で行なわれた。

一般登山者を対象とする登山教室は参加者も多く、継続的教室、短期的講習会など様々な形態のものがYOUTH CLUBおよび20以上の支部で行なわれている。支部が直接運営し、人材育成を目指す登山学校も前年度に発足し、順調に運営されている。

山岳環境保全事業としては、高尾の森づくりの会だけではなく、高尾の森づくりの会だけではなく、三宅島での活動にも取り組んでいる。



令和初の通常総会は、会員129名が出席して開かれた

る。また、全国10支部も相互に連絡を取りつつ、森づくり活動を実施している。

会員動向は、平成12年度のピーク以降、10年以上にわたって毎年100名程度減少していたが、近年は正会員と準会員を合わせると微減となっている。平成31年3月現在の会員数は4770名。年間では150名の新入会員と100名の準会員の入会があった。

【収支決算】平成30年度は、前年の黒字転換を受けて、かねてより検討してきた将来の財政基盤強化に向けての諸施策を実行する段階へと進んだ。結果は、黒字は継続したものの、前年度を下回る実績と

なった。要因は、本年度も会員数減少による会費収入の減少が継続したことと、事業収入および寄附金収入も減少したためである。

経常収益合計8781万円は、対前年度比で947万円、9・7%減少。経常費用合計は8659万円となり、対前年度比で896万円、9・4%減少。結果、経常利益は122万円の黒字となった。最終損益である当期利益も同額であり、対前年度比50万円、29・1%の減少となった。

【収益の推移】会費・入会金については、準会員は91名と安定的に増加しているが、正会員は退会者と物故者が入会者を上回り、正会員数の純減は119名。このため受け取り会費は5065万円となり、前年度比で3・0%の減少。会費と入会金の合計額は5384万円、3・2%の減少となった。

事業収益は、主に年次晩餐会の参加料収入(当期729万円)などであるが、合計で1460万円となり、対前年度比で341万円、19・0%減少。これは支部での登山講習会の中止などにより、登山講習会収益が239万円減少したことが大きな要因である。

寄附金などは、会員寄附金についてはほぼ横ばいであったが、大規模な寄附募集が少なかったことから、会員以外からの寄附金が197万円減少した結果として、当年度は対前年度比で388万円、22・6%の減少となった。

【事業費と管理費の推移】事業費と管理費は総額で8659万円となり、対前年度比896万円、9・4%の減少となった。主たる要因は、旅費交通費が193万円、印刷・製本費が263万円減少したことである。

以上の報告があったのち、平井拓雄監事から、収支計算書などが正確かつ妥当であることを認める監査報告があった。質疑応答ののち、賛成多数で事業報告、決算報告は承認された。

■令和元年・2年度役員選任

本総会をもって理事15名・監事2名は任期満了となるため、次期役員案が検討された。新理事候補者のうち、再任は7名、新任は8名。新監事候補は1名が再任、1名が新任。永田総務担当常務理事によって名前が読み上げられたのち、質疑応答を経て役員案は承認された。

なお、総会終了後、臨時理事会が開かれ、互選により以下の執行理事の役職が決まった。

▽会長Ⅱ古野 淳▽副会長Ⅱ野澤誠司(再任)、山本宗彦、坂井広志、▽常務理事Ⅱ永田弘太郎(再任)、古川研吾(再任)、萩原浩司

■平成31年度事業計画・予算案

【事業計画】平成31年度の予算案は、かろうじて黒字は続けているものの、本会の財政状況はさらに厳しさを増すものと考えられる。そのため、新たな増収策を模索するとともに、可能な範囲において各事業を抑制することなく、経費の削減に努め、安定的な発展を目指していく。具体的には、支部活動やYOUTH CLUBの活性化とともに、導入から3年を経過した準会員制度の制度検証や会員サービスの拡大・深耕を進め、将来に向けての会員増強と財政基盤の強化を進めていく。また、日本山岳会が提唱した「山の日」は平成31年度で4回目を迎えるため、「山の日事業委員会」や「家族登山普及委員会」の活動を各支部と連携しながら推進する。

【収支予算】近年の赤字解消のた

めの様々な施策が結実し、平成29、30年度とわずかながら決算の黒字化を実現できた。平成31年度は会員数増加および寄附金募集を基本とする収益改善策を柱とし、10月に予定されている消費税増税の影響も考慮して、各種活動に対する適切な費用削減の知恵を織り込んで継続的な収支の改善に努めていくことによって、317万円の黒字化を実現する。

■その他の報告事項

そのほかの報告事項として、重廣恒夫・副会長より120周年記念事業の進捗状況について報告があった。平成29年12月から令和元年6月まで月1回の会合を15回実施。現在、「ヒマラヤ・キャンプ」「グレート・ヒマラヤ・トラバース」「ヒマラヤ登山映像ライブラリー整備」「日本・エクアドル外交関係樹立100周年交流事業」「日本山岳会エベレスト登頂50周年記念事業」「山の天気ライブ授業」「グレート・ヒマラヤ・トラバース/キックオフ・トレッキング」などのプロジェクトの内容検討を各部会で進めている。今後の課題としては「プロジェクト・メンバーの早期確定」「記念事業委員会

メンバーの再構築」「他事業の確定」であり、プロジェクトの実施計画が策定されて予算が算出された時点で「120周年記念事業募金委員会」を立ち上げる予定である。

■質疑・応答

俵山守男会員(9742) 理事候補者の安井康夫さんは現在70歳。理事の定年制に抵触しているのではないのか。

小林会長 定款では「70歳を超えない者」となっているので、70歳の再任は問題ない。

神崎忠男会員(6002) 新しい役員候補者の選考基準を教えてほしい。また、評議員会は選考に関与しているのか。

小林会長 新役員の選考は、まず現理事から推薦してもらったうえで、理事会として検討して候補者を絞り、決定している。評議員会は会長の諮問機関という位置付けのため、理事会で決めた候補者について意見はいただいているが、決定は理事会で行なっている。

長田義則会員(5465) 次の会長や副会長はどのように決めているのか。この総会で発表はできないのか。

小林会長 次期会長・副会長は、

本総会終了後の新理事による臨時理事会において互選で決まる。そのため、本総会では発表できない。
吉井英生会員(15655) 今回報告があった120周年記念事業のプロジェクトは、会員それぞれがいろいろな関わり方ができそうだと感じた。会全体の活性化にもつながるはずなので、ぜひ実現してほしい。

重廣副会長 資料には私のメールアドレスも記載してあるので、興味を持たれた方、意見のある方は連絡をしてほしい。

有元利通会員(9703) 山梨県の富士山登山鉄道構想や、国有林を伐採する権利を最長50年間も民間業者に与える改正国有林野管理経営法など、山岳環境保全と逆行する事案に対して、日本山岳会として異議を申し立てるべきではないか。

小林会長 詳しい情報を入手して、対応を検討したい。

長田義則会員(5465) 会費収入の恒常的な減少に加え、今年度は消費税も増税される。四半世紀、年会費の金額は変わっていないが、値上げを検討すべきではないか。

小林会長 会員が増えない要因と

して、年会費や入会金が高いからだという指摘を受けている。現時点での会費の値上げは会員の減少につながる可能性が高い。魅力ある会にして会員を増やし、会費収入を増やしていくことが大切だと考えている。

有元利通会員(9703) 準会員制度を導入して3年が経過しているが、入会者、退会者、正会員への移行者の数を教えてほしい。

重廣副会長 入会者は16年34人、17年92人、18年100人。そのうち退会者は17年に2人、18年に9人。正会員への移行は17年に4人、18年に8人となっている。

筧 邦男会員(13052) 入会して2、3年で退会する方が毎月何人かいる。彼らの退会理由は何か。
永田総務担当理事 高齢でもう山に行けないからという理由が一番多い。また、近年の新入会員の中には、入会すれば会が何かを企画してくれるだろうと考えている方もいる。日本山岳会は会員自らが自主的に活動する組織なので、そうした思惑とのズレもあるかもしれない。

(報告Ⅱ谷山宏典、写真Ⅱ大塚幸美)

会長退任にあたって

会員番号7915 小林政志

このたびの総会をもって会長を退任いたしました。2期4年間、会員の皆様に支えられ、また理事、役員の方々のサポートによって任期を全うでき、感謝申し上げます。ありがとうございました。

私は尾上元会長、森前会長が進めてきたYOUTH CLUBと支部の活性化の二本柱により会員増強を図るという方向を踏襲しつつ、前執行部で検討を進めていた制度改革、収益事業、会員サービス事業の3プロジェクトを再生委員会としてまとめ、検討から実行段階へと一歩足を踏み出しました。制度改革では準会員制度を導入し、入会制度や規定の見直しを行ないました。この制度も3年目に入り、現在は検証と見直しの段階に入っ



小林政志前会長

ております。また、収益事業では「山のお弁当」を商標登録し、業者が販売することにより商標の使用料を収益とすることを考えて実行しましたが、販売ポイントに恵ま

れず、2年で販売中止となつてしまいました。しかし、収益事業は当会の収益構造の改革には大変重要で、今後も模索と試行錯誤をしていかねばなりません。会員サービス事業は新会員証を発行し、会員証提示により山小屋等のサービスを受けられるというもので、多くの会員に受け入れられました。会員としてのメリットを増大するよう今後も拡大していきます。

また、一昨年には2025年、創立120周年に向けての「記念事業委員会」を発足させました。

支部の活性化を視野に、将来の発展に寄与できる記念事業を検討しているところです。前倒しできる事業については、早期に実行に移す方向で推進しております。

以上のような事業面の施策の一方、財務面では3年目で黒字化ができ、4年目もわずかですが黒字

継続ができました。会員増強の努力、経費削減、そして、会員の方々の寄附によるものです。当会が公益法人となり、公益事業の拡大が求められるなかで、会費のみで運営を賄うには限界があります。そこで寄附をお願いすることと、寄附をいただいた方に対して、当会として報いる制度の充実に努力をしてきました。

一つは税額控除の活用推進、もう一つは高額寄附の方に報いるため、国からの「紺綬褒章」を推薦できる法人となることです。ハードルは高かったですが、内閣府に申請し認められました。これは公益法人の中でも多くありません。今後とも会員の寄附に対する認知が高まるよう、努力をしていきたいと考えています。私もわずかでも寄附することにより当会運営の援助

会長就任にあたって

6月22日、総会とその後の臨時理事会で会長に選任されました。令和新时代にどんな登山が展開されるのか。やはり若いクライマーへの期待は大きいものがあります。

となるよう心掛けたいと思っています。

昨年は改革事業推進委員会を立ち上げました。「これからの日本山岳会の姿は、どのような山岳団体であるべきか?」「ほかの山岳団体とどう違うのかを明確にすべき」をテーマとしました。大きくは進んでおりませんが、未知の山・探検的要素のある山へチャレンジする人材を育てよう、それはJACの役割ではないかと考え、その体制作りを進めてきました。残念ながら、今後の推進は次期執行部へバトンタッチとなりました。

まだまだ課題が残るなかでの引き継ぎとなり心苦しいのですが、新しく発足する理事会への会員皆様の支援、応援をお願いいたします。退任の挨拶とさせていただきます。

会員番号12194 古野淳

山は内面のスポーツで、他人と競ったり、登ったピークの数を誇ったりするものではありません。事故は絶対に起こしてはなりません。自制心も必要であらうし、自



古野 淳新会長

分に何が足りないのかを論理的に考える必要があります。しかし、それでも高難度の登山に挑戦したいのであれば、遭難のリスクを自らが容認し、万一のときの態勢まで考えて計画、行動するのが会員の務めであると思います。

今年度より花谷泰広氏主宰の「ヒマラヤ・キャンプ」が新しくJAC内での活動となります。若手クライマー養成が目的で、ヒマラヤ登山を目指します。そのための環境づくりに力を入れて、将来のJACを背負っていける人材を育成していきたいと思います。

会員数は2002年に5995人のピークを迎え、18年には4770人へと17年間で20%減少しています。当会は収益事業を行なうことが難しい組織なので、会員増強を図ることが唯一の道です。

今年は16年10月1日に制定され

た準会員制度が3年を経過し、正会員への移行か退会かの選択が始まります。入会のハードルを下げ、会員を増やすための制度変更でしたが、近く結論が出始めます。新入会員が委員会、支部、同好会に所属することで、JACのクラブライフが充実していくことは間違いありません。諸先輩方の協力が大きな力になりますので、ご指導のほどどうぞよろしくお願いします。

新しい時代に向かって「4つの柱」を考えてみました。

①遭難防止 警察庁発表の2018年の統計によりますと、山岳遭難者数は3129人で過去最高となり、死亡・行方不明者数は342人と、過去2番目となっています。特に単独登山の死者・行方不明者は206人と、異常に高い数字です。JACでは登山計画書の提出と、各組織での計画書チェックを啓発してきましたが、単独入山はやめて、パーティで行動するようにお願いします。登山講習会には、さらに力を入れていきたいと思っています。

②山岳文化 日本の山々の美しさは、険しい高山の山岳美だけでなく、深山幽谷にもあります。我々

日本人は神話時代、さらには縄文時代へ遡って、春の雪解けや秋の収穫の喜びを神に感謝し、山に神様を見送り、迎えてきました。修験道は日本古来の山岳信仰が様々な宗教と融和しながら発展し、その霊性は今でも受け継がれていると感じます。

世界に類を見ない豪雪が生み出す山岳地形として、立山などで6つの「氷河」が確認されました。いくつかは登攀を伴うようなアプローチが必要ですが、一度は自分の目と脚で確認するのも楽しいかと思っています。以上は、いずれも秩父宮記念山岳賞を受賞された飯田肇・福井幸太郎両氏、鈴木正崇氏、小嶋尚氏が詳しく発表されており、日本の山岳文化の奥深さを知っていただければ、さらに楽しい登山ができると思います。

③支部活動 再び全国の支部が力を合わせて、一つの目標を目指すことができないかと考えています。百周年の「中央分水嶺踏査」では、日本列島の地図上に1本の線がつながりました。2025年は山岳文化的なアプローチで、再びその充実感と感動を味わいたいと思います。伝承や民俗学的、考古学的

な資料を基に「いにしえの道」を支部単位で調査し、全国規模で探査ピークを目指すだけではなく、山旅の楽しさを、地元で長く山岳文化に親しんでこられた支部の先輩方にご教授いただき、全国の会員がその道や山を好きになっていただこうという試みです。一朝一夕にできることではないと思いますが、再び道なき道を歩き、知恵と体力を使って目標に近づきたいと希望します。

④自然保護 JACの自然保護運動の原点は、尾瀬をダム計画から守ったことから始まっています。そして、西穂―上高地ロープウェイ、上高地スカイライン、富士山ケーブルカー、奥秩父連峰スカイライン、屋久島ロープウェイ、鳥海山および岩菅山スキー場開発計画を中止に追い込みました。高山でしか生きていけないライチョウや四国のツキノワグマは、山中で絶滅の危機に瀕しています。先人の知恵と行動力を見習って日本の山岳環境を守っていくのは、JACの最重要な務めであることを認識し、会員自らが自然保護活動に積極的に関わっていただければ幸いです。

REPORT

晴天の下、第73回ウエストン祭開催される

信濃支部 古幡開太郎

ウォルター・ウエストン師は、1888(明治21)年から1911(大正4)年まで、宣教師として都合3回日本に滞在する間、北アルプスをはじめ日本の山々を登られました。英国に戻ると日本での経験を『日本アルプスの登山と探検』として出版し、日本の山を英国に紹介されました。また、それまで狩猟や信仰などで登られていた山を楽しんで登る、いわゆる近代登山を指導され、日本山岳会創立の立役者のおひとりとして活躍されました。

1937(昭和12)年、こうしたウエストン師の日本の登山界に尽くした功績を讃え、勲四等瑞宝章が贈られました。日本山岳会はこれを記念し顕彰するため、横有恒、松方三郎両会員が中心となり上高地・梓川右岸の花崗岩露頭にウエストン師のレリーフを取り付けました。制作者は本会の佐藤久一朗会員でした。

しかし、第2次世界大戦が激しくなった1944(昭和19)年、ウ

エストン師が敵国となった英国人であることと、金属供出等での問題発生を懸念し、松本の石工・金子光雄と助手・原克巳両氏がレリーフを密かに取り外し、本会会員の交野武一と茨木猪之吉が東京・虎ノ門の日本山岳会ルームに持ち帰りました。不幸にも1945(昭和20)年5月25日の東京大空襲でレリーフは一部焼損してしまい、後年、焼け残ったレリーフを彫刻家・松浦藤太郎が修復し、1947(昭和22)年6月14日、横有恒、松方三郎両会員らによって上高地に戻されました。この復旧式がウエストン祭の嚆矢となり、また、第4回からは信濃支部が運営主体となって今回まで続いています。

今年で第73回を迎えたウエストン祭は、6月2日(日)午前10時、例年のとおり上高地ウエストン広場で執り行なわれました。今年は4月に降った大雪の影響で、毎年この時期に見られるコナシの白い花もようやく咲き始めたばかりでしたが、心配された天候も晴れ、前

日降った雪に覆われた穂高連峰を望みながらの祭典となりました。

まず米倉逸生・信濃支部長がウエストン師碑の歴史とウエストン祭開催の意義について挨拶され、碑前祭が開会しました。式典は、地元安曇小学校4年生代表児童によるウエストン師碑への献花と、安曇小学校4・5・6年生による「ウエストンを讃える歌」の献歌から始まり、山で亡くなられた先人たちの追悼するとともに、山の安全を願って黙祷を献げました。次いで主催者である日本山岳会・小林政志会長の挨拶、ご来賓を代表して協賛団体である松本市・坪田明男副市長にご挨拶をいただきました。小林会長はウエストン祭開催に対する協力者・協力団体への謝意を、本会会員でもある坪田副市長はウエストン師が上高地に残した登山ノートの復刻と、ウエストン師と上條嘉門次の交友関係を記した本の紹介をされました。安曇小学校児童による合唱により、式典の部を閉じました。

記念行事の部では、前日、6月1日(土)に行なわれた徳本峠記念山行について、山行リーダーである信濃支部・松本潔会員からの報告



ウエストン碑を背に安全登山の講演をした野口いづみ医師

の後、碑前祭のメイン行事である記念講演が行なわれました。講師である東京多摩支部支部長で、本会医療委員長を務められた野口いづみ会員は、「安全登山のために体に気を付けること」と題し、医師としての登山経験から山での熱中症対策には塩分を含んだ水の補給と首筋を濡れタオルで冷やすなどが有効、捻挫へのテーピング方法や漢方薬を使った脚攣り対策などについて話されました。用具を使い、実演を交えた分かりやすい講演でした。

記念講演の後、司会進行の信濃支部・角田啓蔵会員は、来年も6月第1日曜日、ウエストン広場での



ウエストン広場に集合したウエストン祭関係者一同

再会を約して碑前祭を閉じました。

この後、会場を上高地温泉ホテルに移し、午餐会が開かれました。午餐会には関係機関および協賛団体の代表者も参加され、青木保良・ウエストン祭実行委員長より感謝の意が表されました。ウエストン祭は関係機関と松本市、上高地観光旅館組合、北アルプス山小屋交友会、自然公園財団上高地支部、上高地タクシー運営協議会、アルピコ交通(株)など協賛団体の支援により運営されていますが、ご協力に

感謝申し上げます。

第73回記念手拭いは「保福寺峠からの北アルプス」記念バッジは「タカネザクラ」でした。

(信濃支部総務委員長)

今年も徳本峠越え記念山行に300名余が参加

信濃支部 松本 潔

第73回ウエストン祭前日の6月1日(土)、徳本峠越え記念山行が好天の下、実施されました。この記念山行は、ウエストン師生誕百年の第15回(1961年)から続けられています。

この日朝5時、島々公民館に集合した本会会員、一般参加者等々が見守るなか、米倉逸生・信濃支部長が挨拶した後、今日の島々谷登山コースの状況と注意を聞き、ストレッチ体操を行なって6時前に出発しました。島々公民館では、地元島々町会の皆さんから茶菓のご接待をいただき、出発に際しては森武昭・前日本山岳会会長らのお見送りをいただきました。参加者は日本山岳会会員、安曇地区児童と関係者、関係機関・諸団体、一般参加者で総勢300名余となりました。参加者はそれぞれの責任

の下、徳本峠を越えて上高地を目指しますが、先頭近くと最後尾、並びに中間には信濃支部会員が配置され、医療担当の医師会員も同行して、万一の場合に備えた対応ができる態勢をとりました。

出発してしばらくは島々谷川に沿って林道歩きが続きますが、林道終点の二俣では早めに出発した人たちが休憩していて、さらに先行している人もいます。二俣からは島々谷南沢に沿って緩い登りの登山道になります。細い谷に架けられたいくつかの橋を渡って、岩魚留小屋を目指します。途中2ヶ所の崩落がありました。事前の登山道改修により整備されており、問題なく通過できました。岩魚留小屋を過ぎ、島々谷南沢から峠沢に入ってしばらくすると登山道は九十九折となり、登り切ると徳本峠に到着します。峠南側直下の雪はほぼ溶けていて、安心してま

した。峠では徳本峠小屋のご厚意による美味しい豚汁が参加者に振る舞われ、ひと息つけました。

徳本峠からの下りでは黒沢上部の2ヶ所に残雪がありました。事前にトレースを付けていたので、問題なく通過できました。明神では満開のニリンソウが参加者を迎えてくれました。時間差はありましたが、参加者全員が無事に徳本峠を越え、上高地に到着しました。

この徳本峠越え記念山行実施に際しては、毎年、次の団体に登山道事前整備をいただいております。改めて御礼を申し上げます。環境省中部山岳国立公園管理事務所、国土交通省松本砂防事務所、長野庁中信森林管理署、長野県自然保護課、松本市山岳観光課、自然公園財団上高地支部、信州まつもと山岳ガイド協会やまたみ、古道徳本峠道を守る人々。

(信濃支部山行委員)

IMPRESSIONS

徳本峠越えとウエストン祭に参加して

松本博子

山好きの両親に連れられて小学生のころから山に登っていて、

「徳本峠」の名前は子ども時分から知っていた。高校で山岳部に入っ

たが、徳本峠を越える機会はなかった。昨年、日本山岳会とご縁がつながり、入会したのが5月下旬。当日の1週間前に連絡してみたが、さすがに参加申し込みは締め切られていて来年度へ。

ということ、待ちに待った徳本峠越えとなり、父からもらったウェストン著の『日本アルプスの登山と探検』も読み、どんな所かイメージを膨らませた。ただ、その日のうちに上高地まで踏破するため、コースタイムは10時間。私の



徳本峠で記念写真に収まる記念山行参加者たち

1日の最長歩行時間が8時間半なので、最後はどうなってしまうのか未知の世界。挑戦にワクワクし、もう一つの楽しみである、峠からの穂高連峰が眺められますようにと祈る。

6月1日土曜日、青空の下、島々公民館前の広場を6時に出発。まずはほぼ平坦な林道を1時間40分かけて二俣へ。すでに数十名もの登山者が休憩していて、トイレに並ぶ。ここからは狭い一本道で、しっかりした橋を何回か渡る。雪解

け水がいかに涼しげな川の音をずっと聞きながら、新緑に包まれ、足元に咲く花々に励まされての4時間。

途中にあった石碑の説明により鎌倉時代や戦国時代に思いを馳せ、有名な岩魚留小屋のかたわらに立つカツラの巨木を見上げながら、地元の方に案内されて登ったウェストン夫妻を感じたであろう母国との違いに想いを巡らせる。さらに、すばらしい森の中にときおり出現する巨木に挨拶し、山に長くいて同化しそうになる初めての体験を不思議がり、野生

のワサビやニリンソウ、エンレイソウ、サンカヨウなどを写真に収め、あつという間に最後の登りにさしかかる。その直前に、信濃支部の方がヤマシヤクヤクの咲いている所をご指示くださったが、下見や登山道の整備を含め、感謝の気持ちでいっぱいとなる。

さすがに足が疲れてきたので、九十九折をゆつくりゆつくり歩を進める一方、穂高連峰が見えるうちに着きたいと、気は急ぐのだった。力水で喉を潤しパワーをもらって、ようやく人の声が近付いてきた、と顔を上げると、ずらっと穂高連峰が顔を並べているではないか。思わず「見えたー！」と声を上げると、かたわらで休憩していた方に「良かったね」と声を掛けられる。

12時55分到着。いかにも峠という地形と風情の場所で、風がさわやかに吹き抜ける。東海支部員で6回目の方が、「この眺めはまだ2回目」とおっしゃるのを伺い、天気に感謝。「ウェス豚汁」を横目にスケッチと写真で忙しく、匂いのみいたたく。

峠から下りにかかる、残雪がある数ヶ所では事前にステップを

切ってくださいとあり、アイゼンなしで不安なし。初めての山研到着は16時前。想像よりもずっと大きくてきれいで、思わず歓声を上げるチロル風の山荘。お風呂もありがたく、山研委員会の方々、管理人ご夫妻によるおもてなしに深く感謝した。40名ほどがびったり入った食堂での夕食では、委員の方々、東海支部の方々と話も弾み、気付けば22時の消灯時刻。バタンキュー。

翌日は薄曇りの中、ウェストン碑の前で安曇小学校4・6年生10名による合唱、リコーダー演奏、信濃支部の方による詩の朗読、野口いづみ医師の講演、その後、温泉ホテルに移っての午餐会。上高地関係者との懇談を楽しんだ後は、恒例のカレーライスを美味しく頂戴し、解散。

関係する方々の想いで第73回までつながり、横顔を見せるウェストン師もうれしいのでは、と感じられた。まだ人も少なく静かな上高地、島々谷の渓谷美、白銀の穂高連峰、盛夏とは違う花々、山岳会の皆様の想いに触れた、すてきな山行だった。

支部長が代わりました

北海道支部 藤木俊三さん

4月の支部総会で13代目の北海道支部長に選任されました。入会10年未満の私には荷の重い大役ですが、諸先輩が築いた伝統を汚すことなく務めていく所存です。

私は新潟県胎内市に生まれ、飯豊・朝日の峰々を仰ぎながら育ちました。本格的な登山体験は中学3年夏の月山で、残雪の多さと咲き乱れる高山植物に感動しました。高校時代は山とは無縁でしたが、松本での大学時代はスキー山岳部というクラブで山登りを楽しみました。活動は縦走や山スキーが中心で、夏の大雪山縦走や尾瀬の山スキーは思い出深い山行です。

北海道の民放に就職後も登山は続けていましたが、職場が報道部に移ってから「趣味」ではなく「仕事」で登る機会が増えました。



北海道支部長 藤木俊三さん

最初の大きな仕事は1988年、今回、千葉支部長になられた松田宏也さんとの登山です。中国・ミ

ニヤコンカで両足を膝下から失った松田さんが義足で本格的な登山を再開し、厳冬の斜里岳に挑むというドキュメンタリー番組を制作、TBS系列で全国放送されました。

90年には、81年にミニヤコンカで8人の犠牲者を出した北海道山岳連盟が再起を期して送り出した登山隊に報道隊員として同行、翌91年7月、ソ連・カムチャツカ半島の最高峰クリチエフスカに挑む北海道の合同登山隊にテレビ取材班として参加しました。歌人・俵万智さんが大雪山を縦走する番組や、遊楽部岳の航空自衛隊ヘリ墜落現場の取材などは忘れられない「仕事登山」です。JAC入会も日高山脈・幌尻岳の排泄物人力運搬ボランティアに取材を兼ねて参加したのがきっかけでした。

さて、支部は高齢化と会員数の減少という多くの支部同様の悩みを抱えています。新しい体制では会員増強と魅力ある山岳会を目標に事業を見直し、多彩な支部山行を計画しました。「元氣な北海道支部」を目指し、頑張ります。

千葉支部 松田宏也さん

私が山を始めたのは、同志社大学に進学してからだ。山岳同好会という名前の緩さからハイキング部のつもりで入ったのに、意に反し厳しい登山が待っていた。4年生のときにアラスカのヘイズに遠征、初めて海外に出かけ、氷河を抱えるどでかい山に登ったことが、私のその後の人生を大きく変えることになった。地球上には8000mの山が14座もある。なんとしてもそれを登りたい、という夢を持つようになった。

卒業後、千葉県の市川山岳会に入会。1982年、中国・四川省のミニヤコンカに遠征したが、頂上直下で悪天にかまり遭難。19日後、奇跡的に生還し九死に一生を得たものの、両手指と両足を膝下15cmより失った。

2年後、山から呼ばれるように、



千葉支部長 松田宏也さん

ようやくと義足で登山を再開。すると今まで気付かなかった山の恵みの奥深さを感じるようになってきた。四季を通じて各地の山を登れば登るほど豊かな自然に心癒され、改めて山の持つ力に魅了された。1995年、徐々に気力・体力が充電できるとシシヤパンマ(8027m)に遠征、最終キャンプ(7430m)まで達することができた。絶望のミニヤコンカから13年後には、夢の8000mへと人生が大きく飛躍した。

山あり谷ありの人生も3年前に定年を迎え、同時に東京から千葉に転居、それを機に千葉支部に入ったわけだが、このたび支部長という大役を仰せ付かった。会員の高齢化、指導者不足など、千葉支部の抱える問題はどの支部にもあること。けれども、山行が活発ならば、その問題は解決方向に行くと私は思う。四季を通して山の恵みに触れ、汗と一緒に喜ぶ仲間がいればこそ生き活きとした登山人生が生まれ、老いも若きもが山談義を重ねながら互いに成長し、今の時代に沿った支部に変化していくはずだ。そのための方角付けと、手助けするのが私の役目だ。

支部長が代わりました

越後支部 桐生恒治さん

5月25日、越後支部総会で第10代支部長指名を受け、6月12日、本部理事会で承認されました。日本山岳会では、大学時代から学生部に顔を出しており、1973年、学生部インド・ヒマラヤ登山隊に参加し、入会しました(会員番号7675)。その後、学生部、集会、高所登山、指導、青年懇談会などで活動、76年、ナンダ・デヴィ登山隊として小林前会長や重廣前副会長らと遠征に参加、85年、中国登山隊参加を機にUターンして越後支部に編入しました。



越後支部長 桐生恒治さん

越後支部プロパーではありませんが、2011年から4年間、事務局長として公益法人化移行時の支部業務に対応し、15年より4年間、副支部長で全国支部懇談会開催や支部70周年記念・日本三百名

山越後支部執筆21座踏破計画を実行、支部事業の活性化を推進してきました。

越後支部は2番目に誕生した支部で、伝統と実績を有しています。が、令和新时代に向け支部のベクトルを結集したいと思っています。公益法人化を契機に支部事業の多角化を実践し、公益事業で公募登山(年3回)や8月11日「山の日」の糸魚川ジオパーク子ども登山教室、共益事業で支部会員山行(年3回)や平日トレッキング(年3回)、スノー・トレッキングやフォト・スケッチの同好会を立ち上げました。なお、高頭祭と弥彦山たいまつ登山祭など従来行事は継続的に開催しています。

越後支部の良き伝統を発展させ、新規事業を提案する「温故知新」がモットーです。しかし、支部会員の平均年齢は74歳と高く、次世代を担う若手会員の勧誘・加入・育成が喫緊の課題です。今年度からYOUTH委員会を新設し、若手会員の取り込みを重点ミッションとします。本部YOUTH CLUBの協力を得て具体的アクションを策定しており、結果と実績を出したいと考えています。

関西支部 茂木完治さん

1947(昭和22)年、栃木県生まれ。幼少のころ日光に育ち、山に親しむ。東京都立大学付属高校山岳部で山の手ほどきを受ける。1972年、名古屋大学理学部を卒業し、ダイキン工業に入社して現在に至る。

1973年、大阪わらじの会に入会し、以後、沢登りで過ごす。82年に台湾の最高峰・玉山の沙里仙溪を試登して、標高差3000mという台湾の溪谷の規模の大きさに心を打たれる。83年に沙里仙溪から玉山に登頂、84年、雪山の七家湾溪、85年、南湖大山の陶塞溪、86年、北大武山の隘寮南溪、88年、大霸尖山の大安溪を登った。

台湾へは今でも毎年のように通い、台湾五岳三尖一奇(玉山、雪山、秀姑巒山、南湖大山、北大武山、大霸尖山、中央尖山、達芬尖山、奇



関西支部長 茂木完治さん

萊北峰)に登頂した。なお、98年に海外での沢登りに専心するため大阪わらじの会を退会し、海外溯行同人を設立した(昨年、解散)。

1999年に韓国の雪岳山の谷を登って韓国の花崗岩の谷の美しさに気付き、小金剛、武陵溪谷、内廷山、周王山、嶺南アルプス、鬱陵島、智異山、月岳山などの谷を巡った。

その他の国としてニュージーランド、ニューギニア、ボリビア、中国・四川省、グアム島、スペインの谷も訪れた。2007年に踏査結果を『海外溯行研究No.1—台湾の谷』、09年に『海外溯行研究No.2—韓国の谷と山』にまとめた。02年に日本山岳会に入会、16年に関西支部設立80周年記念事業の東ネパール登山隊に参加し、ナンガマリII峰に初登頂した。

このヒマラヤ登山がネパールの溪谷に目を向けるきっかけとなり、今はヒマラヤの沢登りを志している。未記録の谷を登る(あるいは下る)のは探検だと思う。日本には数少なく、世界には無数の未踏、未記録の谷がある。若い人たちに探検の魅力を伝えていきたい。

支部長が代わりました

北九州支部 日向祥剛さん

令和の時代が始まりました。21世紀最初の、25番目の支部として発足した北九州支部。関口前支部長からバトンを受け、第6代の北九州支部長に就任しました。

今年6月に古希を迎えましたが心身ともに健康で、地元北九州で港湾運送を中心とした物流会社を経営しています。業界や地域の各種ボランティア活動のリーダーも務めている現役です。登山は喘息を克服するために小学生のときから始め、大学までは生物部で蝶や植物の採集のために山や離島を回っていました。山岳会に入会してからは、九州の山を中心に日本の山々を登りました。

福岡支部時代から役員を務め、北九州支部立ち上げに参加して事務局長、役員、副支部長を務めま



北九州支部長 日向祥剛さん

した。東九州支部、北海道支部の支部友にもなり、縁があるときは行事に参加させていただいております。

還暦を迎えたのを機に、今まで我慢していた海外の山にも挑戦しました。東九州支部の西さんにヒマラヤの手ほどきを受け、ともにランタン溪谷へ。翌年はルクラからカラパタルに行き、キリマンジャロ、エルブルース、アコンカグア、インカ古道を通ってマチュピチュ遺跡なども歩きました。東九州支部のキナバル山、北海道支部のアバチャ山にも参加し、今年4月には28日間、ヒマラヤのスリールパス越えと三大ピークに挑戦してきました。

今、北九州支部も会員の高齢化と減少が大きな問題となつています。来年、創立20周年を迎えますが、横有恒碑前祭の定着、支部の山としての英彦山の研究、平尾台のラムサール条約登録運動、九州他支部との連携など、多くの課題があります。

本部をはじめとして皆様のご指導、ご鞭撻を基に、心新たに頑張つてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

参加者募集!

〔日本山岳会創立120周年記念事業〕

2025年に創立120周年を迎える日本山岳会の記念事業の一つとして、「グレート・ヒマラヤ・トラバース」を2020年から25年にかけて実施予定です。日本山岳会のヒマラヤ登山の足跡を、ネパール・ヒマラヤ東端のカンチェンジュンガからカラコルム・ヒマラヤ西端のK2までたどる、ヒマラヤ山脈横断5000kmの「温故知新の旅」です。

踏査開始に先立って、「グレート・ヒマラヤ・トラバース」プロジェクトのキックオフ・トレッキングを、ヒマラヤ高峰登山発祥の地、シッキムで行ないますので、ぜひご参加ください。

世界第3位の高峰

カンチェンジュンガ

大展望トレッキング15日間

〔日程〕

10月26日(土) 午前 東京発、デリーへ

10月27日(日) デリー〜バグドグラ〜ダージリン

10月28日(月) ダージリン観光

10月29日(火) ダージリン〜ヨクサム(旧シッキム王国発祥の地)

10月30日(水)〜11月3日(日) トレッキング

11月4日(月) カンチェンジュンガ南壁ビュー・ポイント(4750m)往復

11月5日(火) 予備日

11月6日(水)〜7日(木) トレッキング

11月8日(金) ペリン〜バグドグラ〜デリー・夜デリー発

11月9日(土) 午前、東京着

【参加費・申込みなど】
参加費…45万6000円
参加申込み締め切り…8月末日
資料請求・参加申込み…アルパインツアーサービス(株)

TEL 03-3503-1911
FAX 03-3508-2529
info@alpine-tour.com

担当…久保典彦または小林博史
(創立120周年記念事業員会)

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

遭難対策委員会

長野県・山梨県・静岡県警察山岳遭難救助隊による山岳遭難防止セミナーを開催

2019年6月9日(日)、四ツ谷の主婦会館プラザエフにおいて、日本山岳会・遭難対策委員会主催で山岳遭難防止セミナーを開催した。山岳遭難防止セミナーは、毎年2回、夏山シーズン前と冬山シーズン前に、県警山岳遭難救助隊から講師を招き、実際の遭難現場や救助活動を知ってもらうことにより山岳遭難事故を防ぐことを目的に開催している。

今回は、長野県、山梨県、静岡県各県警の救助隊長、一線で活躍されている救助隊員にお越しいただき、安全登山のために登山者が知っておくべきこと、注意すべきことなど、映像を交えながら分

かりやすく説明があり、また、それぞれの管轄の山域の特徴を踏まえた興味深い内容となった。

最初は長野県警からの報告。まず登山とは何かの問い掛けから始まった。登山はスポーツであるとの認識が遭難防止の第一歩になる。

必要な心構え、山の厳しさは、やはり観光などとは異なるものである。登山とは、自ら学び、そして実践するものであると話がいった。続いて落石や転滑落でヘルメットが事故者を救った事例が紹介され、その有効性、重要性が改めて示された。人為的な落石による事故では、楽しい思い出をつくるはずだった登山で被害者と加害者をつくってしまう。落石は絶対に起こしてはいけない、と強調された。

続いて山梨県警からは、遭難に關しては高山・低山にかかわらずリスクは存在すること、低山では道迷いによる遭難が多発している



第一線で活躍する救助隊のメンバー

ことが報告された。その原因は、低い山ほど登山道以外の林道や作業道が複数混在し、登山道も人があまり入らないため踏み跡が薄く、不明瞭な場合が多いためである。急に登山道が細くなったり踏み跡が薄くなり、「あれっ」と感じたときには、すぐに現在地を確認すること、まだ大丈夫という思い込みを持たないことが重要であるとの話がいった。また、携帯電話による通報の際にバッテリー残量をオペレーターに伝えると、それに応じて聞き取り内容を最小限にするなどの対応を行なうので、予め確認しておくことよい、とのこと。

静岡県警からは、山岳遭難の特

徴として、発生件数、遭難者数ともに富士山が半数を占めており、昨年の開山期間中における発病による遭難は34件、そのうち低体温症が21件、高山病が9件であったとの報告があった。高山病防止のポイントとして、5合目に着いたら1時間ほど留まる、登山中は40〜50分歩いたら休憩を取る、水分をしっかりと摂る、トイレを我慢しないこと、口ずばめ呼吸を試してみる、などのアドバイスがあった。

後半は参加者からのアンケート回答と質問に答える形で進行了。救助隊に入ったきっかけ、どのような訓練を行なっているか、消防との役割分担について、遭難の多いエリア、常駐パトロールの効果、救助隊の視点での備えるべきファーストエイドキット、救助隊として勧めるネット情報源、救助要請のタイミング、救助の際に困ること、助かったことなど、最新の技術から救助隊員の思いまで多岐にわたる情報を知ることができた。

山岳遭難の未然防止は、山岳の特性を知り、経験・体力・判断力など総合力が必要になる。これから本格的な夏山シーズンを迎える時期になるが、体調管理と的確な

判断の下、警察をはじめ各行政機関からの情報も活用して、安全に感動、喜びのある登山を楽しんでいただきたいと思います。

(委員長・川瀬恵二)

山行委員会／遭難対策委員会 救急救助講習会を開催

山行委員会と遭難対策委員会共催の救急救助講習会が6月16日(日) JICA地球ひろばにて開催された。今回で7回目となり、毎回、会員外も含め多くの参加者を迎えている。今回も30名を超える参加者があったが、実技中心なので人数的には限度である。



参加者はバイ・スタンダーの意識で講習に取り組んだ

講師は遭難対策委員会の恵秀彦氏である。恵氏はアウトドアにおける救助活動、ファーストエイド指導者として第一人者であり、日本山岳会のみならず様々なワールドで幅広い活動をされている。経験に裏打ちされたファーストエイドの見識やスキルは実に説得力に富むものがある。今回はファーストエイドの総論に始まり、緊急処置を要する病気等の対応、転倒滑落などへの救助や対処方法等について具体例を挙げながら実際の行動を追いつつ解説していく。

止血の実際、捻挫や足つりの処置方法、さらには熱中症、低体温症、高山病の原因と対策等々、山で遭遇すると思われるほとんどのアクシデントを分かりやすく説明し、対応方法をやって見せ、やってみるという方式で実に分かりやすく、かつ身に付く流れである。伸縮包帯やテープ、三角巾、サムスプリントなどを使いながら参加者がバイ・スタンダーの意識になつて山の現場を思い起こしながら一生懸命取り組む姿が印象的であった。また、参加者の顔ぶれに合わせ臨機応変にアレンジされるなど、さすがである。正味6時間の

講習はあつという間であつた。

言うまでもなく登山は危険と隣合わせのスポーツである。危険をコントロールするには、十分な計画、準備と日ごろの訓練、現場での注意、慎重な判断や行動などが求められる。これらは経験と準備、訓練などによって効果を上げられるものである。しかし、完全にリスクをゼロにはできない。また、いかに豊富な経験や知識があつても防げない面もある。

経験浅い登山者のもとより、大ベテランと自覚している方も常に初心を忘れず、このような講習に

よって知識、スキルのブラッシュアップを図るとともに、何よりも意識のリセットが必要である。それには、肉体を健全に維持するためには定期的に人間ドックを受けなければならないように、このような講習を定期的に受講することが必須の対策である。

安全登山講習なら前に受けたよ、という態度では不十分なのである。ぜひ皆さんの継続的な研鑽をお願いしたい。

(山行委員会委員長・征矢三樹、遭難対策委員会委員長・川瀬恵二)

支部

だより

越後支部

第9回中部ブロック4支部 交流会を開催

6月8～9日に「第9回中部ブロック4支部交流会」が、越後支部主催により新潟県妙高市池の平温

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

泉パークロッヂ関根と笹ヶ峰夢見平で開催された(4支部交流会開催の経緯は会報「山」2011年9月号参照)。支部持ち回りで今回は3巡目である。地元越後支部20名、信濃支部9名、山梨支部4名、静岡支部13名の合計46名の参加があ



パークロッヂ関根前に参集した参加者

り、盛会のうちに終えることができた。

8日12時過ぎから受付を開始し、各支部の参加者が車や公共交通機関で続々と集合し、14時30分、予定どおり開会した。小泉良夫・事務局長の司会で、桐生恒治・越後支部支部長の歓迎の挨拶ののち、信濃、山梨、静岡、越後の各支部からの報告があった。

15時から「登山者にできること〜妙高高原ビジターセンターの環境保全の取組から」と題して、妙高高原ビジターセンター館長・春日良樹氏(越後支部会員)の講演があった。国立公園と外来種繁殖の問題、オオハンゴンソウ、オオバコ、

外来スイレンの駆除など、生態学研究の必要性を説いておられた。なんといつても専門家や人手不足が深刻な問題で今後の課題である。また、妙高戸隠連山国立公園の中でも頸城山塊の火打山は、絶滅危惧種ライチョウの日本最北の生息地として知られているが、その保護活動に1枚に付き10円寄付できるサブレ「妙高雷菓」(1枚110円)をこのたび発売した。用意した150枚も皆さんのお陰で即時完売。

入浴ののち、18時から懇親会。各支部から多数の地酒や個人の方から差し入れられた銘酒が所狭しと並び、宴が進むに従って会話が弾み、あつという間に2時間が過ぎていった。

今回の宿「パークロッヂ関根」は岡山県から移築した酒蔵を山小屋風に改造したレトロな雰囲気の中で情緒たつぷり、おまけに源泉掛け流し。食べきれないほどたくさん料理が並んで大満足。

20時30分、橋本正巳・支部名誉会員の「佐渡おけさ」で中締めをしたのち、会場を移して2次会へと突入。

翌9日は、前日の雨模様が一転、

雲一つない晴天に恵まれ、絶好の登山日和だ。それぞれの車に分乗し、会場の夢見平へ向かった。今回はほぼ平坦な遊歩道。ブナ・ミズナラの自然林、巨木、湿原と変化に富んだ自然たつぷりのコースを春日良樹・ビジターセンター館長の案内で進んだ。

標高1300mに位置し、1週間前、下見時に咲いていたシロバナエンレイソウ、サンカヨウ、ミヤマカタバミ、ミヤマスマミレ、クルマバツクバネソウ、キクザキイチゲ、シラネアオイ、クリンソウ、ルイヨウボタン、ラショウモンカズラ、リュウキンカ、ズミ、笹の花などが咲いていて、目を楽ませてくれた。

遊歩道の途中、山頂に雲が懸かり始めた三田原山を正面に見る大きな湿原で大休止。館長から遊歩道の一部にトロッコの軌道が残っているのは、昔、材木を切り出し運んだなごりで、多くの人が暮らしていたとの説明。12時30分、遊歩道を一周し予定どおり駐車場に戻った。閉会式を行ない、「来年は信濃でまた会いしましょう」と誓って解散した。

(佐藤レイ子)

図書受入報告(2019年6月)

著 者	書 名	頁／サイズ	発 行 者	発行年	寄贈／購入別
NHKスペシャル取材班	激走!日本アルプス大縦断 : 密着、トランスジャ パンアルプスレース	323p／20cm	集英社	2013	出版社寄贈
齊藤倫雄 / NHK取材班	激走!日本アルプス大縦断 : 2018 終わりなき戦い	332p／20cm	集英社	2019	出版社寄贈
阿部幹雄	那須雪崩事故の真相 : 銀嶺の破断	303p／19cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
小野泰子 他	上高地ハイキング案内 : 上高地・明神・徳沢・ 横尾・涸沢を歩く	144p／20cm	TAC出版	2019	出版社寄贈
南会津山の会 (編)	いろりばた : 南会津山の会創立60周年記念誌	104p／26cm	南会津山の会	2019	発行者寄贈
三鍋久雄	勅撰和歌八代集 心旅	592p／31cm	桂書房	2019	著者寄贈



図書紹介

荻田泰永著

考える脚



2019年3月
KADOKAWA刊
19cm 316頁
1500円＋税

到達」と、世界初となる「 그리스・フィヨルド」シオラパルク徒歩横断」だ。この本にはこの2つのことも書かれているが、メインは「北極点無補給単独徒歩」による2回の挑戦である。

荻田さん自身、この本でこう言っている。「南極点への徒歩冒険は、実は簡単なのだ。2016年のカナダからグリーンランドへの単独行は南極点よりも10倍くらい難しいし、北極点無補給単独徒歩は30倍くらい難しい」と。そう考えているから、南極から羽田へ戻ってきたときに、テレビカメラなど報道陣がいても自分のことだと思わず、だれか有名な人が乗っているのだろうか、と思っってしまったのである。

では、北極点到達のどこが難しいのだろうか。私はシロクマに襲われるからだと思った。確かに、シ

ロクマが近付いてきてテントを揺さぶることもあったようだ。

それよりも食糧の問題と海の上であることが大問題だったのだ。極地探検では食糧を予めデポしたり、航空機による補給が一般的だが、「無補給」なのでそれをせず、到達日数を計算し、食糧の量を計算して全部自分で持つていくのである。しかし、ブリザードも吹くので計算どおりにはいかない。

また、北極点は南極点のように陸地ではなく海上だ。もちろん凍っているものの、近年、海水にヒビのように走る、リードと呼ばれる海面が数多く出現しているそう。いつ自分のテントの下にヒビ割れが走るか分からない恐怖がつきまとう。

せっかく歩いてても、海水ごと流されて北極点から遠ざかることもあるようだ。これらのことを想定して準備し、そして、運があれば到達できる世界だったのだ。そのことを、私はこの本を読む中で初めて知ることになった。

(北島洋一)

■第37回図書交換会の出品図書募集について 図書委員会

例年、年次晩餐会会場で開催し、多くの会員から好評を得ている図書交換会を本年も年次晩餐会会場で開催する運びとなっています。そろそろ自分の蔵書を処分したいと思っている方、読まなくなってしまった本が書棚に眠っている方、そんな山岳書をお持ちの方はぜひ出品してください。出品図書を図書交換会で希望者に頒布します。

出品図書は9月9日までに、会員番号を明記して「日本山岳会図書委員会」宛に送料着払い(宅配便が利用できる場合は、出品時に掛かった送料と振込先をお知らせください)でお送りください。

なお、入札本(今回は入札本とする基準を引き下げるつもりです)は落札価格の8割を出品者にお支払いする予定ですが、それ以外の書籍については無償で出品していただくこととなります。また、収入は経費を差し引いた上で、年次晩餐会の会計に繰り入れます。

ぜひ出品本をお寄せください。

問合せ：近藤雅幸

☒satoyama_sgy79.69@icm.home.ne.jp

会務報告

令和元年度第3回(6月度)理事会 議事録

日時 令和元年6月12日(水)19時00分～21時00分

場所 集会室

【出席者】小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・古川・谷内各常務理事、安井・清登・近藤・波多野各理事、平井・石川各監事

【欠席者】齋藤・星理事

【審議事項】

1・120周年記念事業の組織編成とプロジェクト開始承認について
120周年記念事業の組織編成とそのプロジェクトである「グレート・ヒマラヤ・トラバース・プロジェクト」「ヒマラヤキャンプ・プロジェクト」「ヒマラヤキャンピングプロジェクト」「日本山岳会のヒマラヤ登山映像ライブラリー整備プロジェクト」「山の天気ライブ授業」の開始について審議した。

(賛成12名、反対なしで承認)
2・グレート・ヒマラヤ・トラバース／キックオフ・トレッキングの実施について

120周年記念事業「グレート・ヒマラヤ・トラバース・プロジェクト」のキックオフ・トレッキングと位置付ける「カンチエンジュンガ展望トレッキング」の公募および実施について審議した。(賛成12名、反対なしで承認)
3・新支部長の就任承認について
以下の支部長の就任について審議した。

越後支部 桐生恒治(No.7675)(賛成12名、反対なしで承認)
4・C-32「職員給与規程」およびC-33「職員介護休業規程」の制定について
C-32「職員給与規程」およびC-33「職員介護休業規程」の制定について審議した。なお、C-33「職員介護休業規程」については平成30

年度第8回(12月度)理事会においてすでに改正の承認がされていたが、制定手続き上の不備のため現行の内容で改めて制定とすることとした。(賛成12名、反対なしで承認)

【報告事項】

1・通常会員入会希望者14名、準会員入会希望者8名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)
2・寄附金1件の受入について報告があった。(古川)
3・記念事業委員会の活動状況について報告があった。(重廣)
4・山岳研究所運営委員会の活動状況について報告があった。(安井)
5・登山計画書の提出状況について報告があった。(中山)
6・マンションの扉の変更について報告があった。(永田)
7・CASIOからの提案について報告があった。(永田)
8・AUTHENTIC JAPAN(ココヘリ)からの提案について報告があった。(永田)
9・聖護院門跡から連絡のあった大峰山系・前鬼山裏行場修行場の

落書きの状況について報告があった。(永田)

10・令和元年度通常総会出欠ハガキの返信状況について報告があった。(永田)

11・当会の商標登録の更新について報告があった。(谷内)

12・2019年度会費滞納除籍対象者について報告があった。(谷内)

ルーム日誌 6月

3日 総務委員会 記念事業委員会
会 YOUTH CLUB

4日	常務理事会 スケッチクラブ
5日	図書委員会 山行委員会
6日	YOUTH CLUB 山岳地理クラブ
7日	YOUTH CLUB 自然保護委員会 スキークラブ スケッチクラブ
10日	山岳研究所運営委員会 フォトクラブ 里山歴史研究会
11日	山岳研究所運営委員会 フォトクラブ 里山歴史研究会
12日	理事会 休山会 山想倶楽部
13日	支部事業委員会 九五会
14日	図書委員会
15日	山の自然学研究会
17日	総務委員会 資料映像委員会
18日	スキークラブ
19日	三水会 つくも会
20日	科学委員会 みちのり山の会 フォトクラブ マウンテンカルチャークラブ
21日	会報編集委員会 図書委員会
24日	青年部 「山の日」事業委員会 緑爽会
25日	デジタルメディア委員会 平日クラブ
26日	家族登山普及委員会 00会

27日	麗山会 公益法人運営委員会 総務委員会 学生部 01会
28日	山遊会 総務委員会 図書委員会 自然保護委員会 JCA グローバルクラブ
29日	図書委員会 土曜会 6月来室者 588名
会員異動	
物故	
高村奉樹(4642)	19・6・4
大山孝一(5631)	19・4・29
宮本信一(9091)	18・12・20
渡邊富衛(10118)	19・6・12
山崎隆史(10146)	19・6・9
退会	

◆南アルプス・聖平から三伏峠へ
南アルプス縦走シリーズ第5回
山行委員会

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

は、聖平から三伏峠へ縦走します。
日程 9月8日(日)前泊 9月14日
(土)プラス予備日1日

星野 登 (4118)	山梨
日本 伸 (5024)	山梨
赤松 滋 (8281)	関西
上野八郎 (9664)	北海道
大村武敬 (11586)	静岡
羽田雅美 (11813)	北九州
大城戸昌敏 (11979)	北九州
小林銀一 (13725)	北九州
平野和夫 (14326)	東海
野田吉久 (15335)	東海
青木次郎 (15346)	千葉
吉本恵子 (15889)	静岡
高野彩恵子 (15928)	静岡
市原明子 (16066)	東海
関 彩乃 (16376)	東海
洪木香里 (A0007)	富山
濁川 暁 (A0033)	富山
平野智子 (A0162)	東京多摩

寄附金及び助成金などの受入報告

(令和元年5月31日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
梶 正彦 会員	1,000	グレートヒマラヤトラパース プロジェクト基金
	1,000	ヒマラヤキャンプ プロジェクト基金

集合 8日午後6時 天龍村・龍泉閣フロント(泊)
龍泉閣―芝沢ゲート―西沢渡―聖平小屋(泊)―聖岳―兎岳―大沢岳―百間洞山の家(泊)―赤石岳―荒川小屋(泊)―恵沢岳往復―荒川小屋(泊)―前岳―高山裏―三伏峠小屋(泊)―鳥倉林道―まつかわ温泉清流苑―伊那大島駅(解散)
解散 9月14日13時半ごろ 伊那大島駅
参加費 6万6000円
募集人数 11名

申込み 8月20日までに菊池武昭宛
TEL 090-6319-7602
✉ sanko@jac.or.jp

*申込み者に詳細案内を送ります。

◆山研・秋のついで

山研運営委員会

通算20年、上高地で過ごしてきた元川管理人と一緒に上高地を散策しながら自然環境の移り変わりや、山研委員によるミニ水力発電の研究などを紹介します。(雨天決行)

実行

実施日 9月28日(土)～9月29日(日)

集合 9月28日(土)上高地山研に13時(解散12時)

費用 8000円(宿泊費、夕食・朝食を含む)

定員 15名(先着順)

申込み 8月31日(土)までに和田薫まで。

連絡先

TEL 070-1492-7541

✉ jac-sanken@jac.or.jp

*申込み者に詳細案内を送ります。

◆雷鳥のために歩荷のお願い

大森弘一郎

かわいい山のライチョウが絶滅の危機にあることはご存じと思います。それに登山者のお行儀が影響しているかも知れません。その思いで10年ほど前からライチョウ保護の絵はがきを作って配っています。立山室堂山荘や上高地アルペンホテルなど、ここで登山者やハイカーに自由に持っていてもらうのです。雷鳥張り子の募金箱も置いてありますが、毎年、満腹になつていて、このお金で次のはがきを作ることができています。15万枚くらい配りました。

今は室堂周辺の減少が止まっているようで、もしかしたら絵はがき効果かも知れないのです？ 減少の止まらない南アルプスの山荘へ、これを届けたいたのですが、どなたか引き受けていただけませんか。1000枚が3kgくらいです。引き受けてくださる方は、どうか

✉ zero@qb3.so-net.ne.jp にご連絡ください。現物をお渡しします。ご協力お願いいたします。



◆編集後記◆

●先月は群馬県の法師温泉に行ってきました。JRが「国鉄」と呼ばれていた時代に、「フルムーン旅行」のキャンペーンで高峰三枝子と上原謙の入浴シーンが話題になった(1983年)温泉です。そのポスターが大事に飾ってありましたが、撮影の舞台となった「法師乃湯」をはじめ館内外すべてが往時のままで、私は4回目の宿泊ですが、変わらぬ風情に感激しました。

●翌日は温泉から法師沢沿いに歩き、三国峠經由三国山に登る予定でしたが、途中から雨となり、三国トンネルでリタイアしました。登山は消化不良でしたが、温泉がすばらしかっただけに同行した山仲間たちも満足げで、まるで三枝子さんと混浴できたような気分です。喜んでおりました。(節田重範)

日本山岳会報 山 890号

2019年(令和元年)7月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重範
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社